

2014(平成26)年 門信徒だより

慈光(びこう)



第150回 お経の練習会・法話会 !

2014(平成26)年5月11日(日)14時~16時 最誓寺本堂・会館にて

●2014(平成26)年法話会テーマ

「連研テーマにそい、生かされている“この私”のあり方を学びましょう！」

◆今回は「しあわせ」です

◆「しあわせ」には、どんなイメージが？

「しあわせ」と聞くと、皆さんは何を連想されるでしょうか。お金持ちになること、試験に受かること、仕事が成功すること、あるいは健康であること、家族が仲良いこと・・・でしょうか。

◆中学生200人に聞く 「昔の子どもが、かわいそうだと思う時」

日本経済新聞に、興味深いアンケート結果が紹介されていました。

日経新聞子どもニュースPLUS7(2013年10月20日)
「昔の多岐が可哀想だと思うときベスト10」

1位	土曜日にも学校の授業があった	118人
2位	インターネットがなかった	88人
3位	面白いゲーム機がなかった	71人
4位	携帯電話がなかった	68人
5位	エアコンがなかった	59人
6位	テレビが小さくて白黒だった	53人
7位	コンビニがなかった	51人
8位	学校の給食が美味しくなかった	45人
9位	家の手伝いをしなければならなかった	42人
10位	テレビが家に1台しかなかった	41人

小学校5年生~中学校3年生までの男女200人が対象

第1位に土曜日に学校の授業があったことが挙げられていますが、以下多くは見事に「モノ」がなかったことを「かわいそう」とみています。

「モノ」はたしかにあれば便利で快適でしょうが、なければいけないでかわいそうというのはちょっと違うというのが、昔の子どもだった私たちの正直な実感ではないでしょうか。

むしろ、昔の子どもをかわいそうと感じてしまうほどに「モノ」に依存してしまっている今の子どもたちを「かわいそう」と思ってしまうのは間違いでしょうか。

欠乏しているモノが満たされれば、それを幸せであるといえるでしょうか。

「かわいそう」 = 「ふしあわせ」 → 「苦」

◆ 「苦」それは、自分の思いどおりにならぬこと。 つまり、自己中心（我）の心から生じる！

大無量寿経（だいむりょうじゅきょう）には「田あれば田に憂へ、宅あれば宅に憂う。（中略）

田なければまた憂へて田あらんことを欲ふ。宅なければまた憂へて宅あらんことを欲ふ。」と説かれています。

あればあつたで、なければないで、わたしの心を悩ませる（苦・煩惱）。

（前回テーマ「苦」 慈光4月号から）

確かに満たされれば幸せだと感じられますが、それだけではないと、説かれています。

なければないで、あればあつたで・・・ということでしょう。

◆ 「しあわせ」と「幸」 「幸」は「枷（かせ）」

便利なモノを享受している子どもたち、いや、私たち大人も。モノに溢れた

生活は一面では確かに「しあわせ」な姿といえるでしょう。

しかし、同時にそのことでモノに縛られた「ふしあわせ」に陥ってしまっていることもあるのではないのでしょうか。

しあわせは、一般的には「幸」とかきます。

この漢字の成り立ちをご存じでしょうか。幸は、象形文字（しょうけいもじ）です。上部の「土」と下部の「干」が縦二本の線で繋がっているこの字は、もともと枷（かせ）＝手錠を表していました。

人を繋ぎ止めて自由を奪う枷＝「幸」が、しあわせの意味持つようになった経緯は、実ははっきりしていません。

一説では、枷をはめられていた罪人が、それを外されたときに感じる感情が、幸になったとも言われますが、私はむしろ、幸とは、繋がれた状態そのものだと考えた方が自然だと思います。モノや人に繋がれた、客観的に見れば、自由を奪われている状態が、幸（枷）。うなずかれる方も多いのではないのでしょうか。

◆「仏教はしあわせへの道」という「しあわせ」

「しあわせ」は、実は「幸」ではありません。辞書で「しあわせ」を引いてみると、まず「仕合わせ」とあって、次に「幸」とあります。「しあわせ」は「仕合わせ」です。

これは以前「為合わせ」と表記されていました。為＝為されたことが合わさること、つまり「めぐりあわせ」「他者と出会うこと」をしあわせと呼んだのです。

ですので元々は、良いことだけではなく、自分の望んでいない悪いことも「しあわせ」とすることがあったようです。

「仏教がしあわせへの道」であるというのは、まさにこの意味、「他者との出会い・他者の発見」においてです。

誰もしあわせを求めない人はいません。しかし、それによって互いを傷つけ合うことが少なくないのが私たちです。自らのしあわせを求める心が、他者の切り捨てや無視をおこない、結果的に自らを傷つける愚を私たちは繰り返してきたのではないのでしょうか。

他者との出会いは、すなわち自分との出会いなのです。 枷をはめてきた自ら

を見つめ直し、解放することで開かれる仕合わせは、もしかしたら、私たちの全く予想しない姿で立ち現れるかもしれません。(松本智量)

◆「あたりまえ」から「ありがたい」へ

また、苦がなくなった状態が「しあわせ」というのは、その通りだとは思いますが、苦や悩みが何もない状態でも、しあわせを感じられないことはめずらしくありません。

当たり前と思っていたモノが、当たり前ではなかったということに気づき、これまでの価値観や視点の転換がはかれるところに、しあわせが感じられるようになるのではないのでしょうか。

すなわち、今まで当たり前だと思われていたことが、じつは、当たり前ではなかったと気づかせていただき、有り難い＝有ることが難しい＝ありがたいと感じさせていただくところに、人としての大切な心が育まれていくのだと思います。

私の偽らざる心の姿を、阿弥陀如来の真実の光に照らされて、知らされ、慚愧の中にも生かされていることを喜ばさせていただく世界が開かれてくるのではないのでしょうか。

浄土真宗では、「聴聞（ちょうもん）」を大切にしています。仏さまの教えを聞かせていただき、私を振りかえさせていただくことを大切にしているということです。

最誓寺「法話会」に参加を呼びかけているのはそのためです。

あたりまえが、ありがたいと思える世界に触れてみませんか？億劫がらずに！

◆「虎」と「ねずみ」の譬えから

ある男が、荒野で虎に襲われ、切り立った崖から下がった蔓に飛びつき、よじ登って難を逃れようとしてしました。

しかし、崖の上の方では、ネズミがその蔓をかじっており、蔓が切れるのも

時間の問題。虎は下で牙をむきウォーッと吼えています。

その時ふと男は、目の前にみごとに実った野いちごを見つけました。
男は、手を伸ばし、それを口に入れ「美味しいなあ」と。

この男は、野いちごを食べた時、確かに幸福だったのだと思いました。しかし、やがて蔓は切れ、男は虎に食べられてしまうかもしれません。

もちろんこれは、私たちの人生の寓意で、誰もみな一寸先は闇だし、いずれ確実に死が待っているということです。

そんな状況で、食べ物が美味しかったのが、幸福だと言っていいのでしょうか。

「そう。それでいいのだそれが幸福というものなのだ」と言いたい自分があります。が、そういう幸福感は、よくよく考えてみると、本当の幸福感ではないと気づかせていただく自分があることも確かではないでしょうか。

引用

今回の「しあわせ」の内容は、

「連研ノートTokyo スタッフノート」

浄土真宗本願寺派 東京教区作成 千葉組連続研修部改訂

から引用いたしました。

第1回最誓寺お掃除ボランティアを行いました！（13人参加）

5月7日(水) 10時～12時



ごくろうさまでした！